英国春秋

２０１３年　秋号
ＩＳＳＵＥ　Ｎｏ．２３
発行　英国日本人会

はじめに

土曜日のＢＢＣニュースを見過ごしてしまいましたので、ネットで検索、「ありました、ありました、Tokyo、Olympic、2020」。これだけが一度に飛び込んできました。“最有望都市”が落選すると言うジンクスがあるとか、でも、ブックメーカーでは“本命　東京”とかで、決定されるまで、心配と安心のはざまを彷徨いました。

“東京決定”と発表されたとたん、感極まって泣き出した人がテレビに映し出されたそうです。一昔前、某証券会社が倒産した際、「社員には罪がない」と号泣した社長の映像が世界をかけめぐりましたが、日本人って案外“泣き虫”なのですね。“Tight Upper Lips”と言われているイギリス人も、８年前ロンドンが開催地に選ばれた時、抱き合ったり、躍り上ったりして喜んでいました。人前で感情を露わにしない日本人も、たまには喜んだり、泣いたり、そして怒ったりして“生身”であることを証明することが必要なのでしょう。東北被災地の復興問題、竹島、尖閣諸島の領土問題、ＸＸ問題、ＹＹ問題と要解決問題が山積みですが、今回の決定が我々日本人にとって、これからの７年間“朗報”の旗手となってくれることを祈ります。

まさに豊穣の秋、今回もたくさんの作品が集まりました。おかげさまで『英国春秋』秋号　No. 23 が完成しました。原稿をお送りいただいた会員の皆様、そして特別寄稿いただきましたゲスト・ライターの方々、大変有難うございました。執筆者なしでは文集発行も成し得ませんので、今後ともよろしくご支援くださいますように。

特別寄稿　春井久志氏　（関西学院大学経済学部教授）
　　田辺邦彦氏　（在英国日本国大使館　参事官・領事）
　　遠山伊津子氏　（桃山学院大学教授・オックスフォード大学客員研究員）

（アイウエオ順）

＊＊＊＊＊　　も　く　じ　　＊＊＊＊＊

九州一周の旅	田村陽子	３－　４
今は亡き夫を忍んで	矢嶋蓉子	５
私の失敗談	ヴァンダースケイフ日出美	６
エーデルワイスとアルプスの国へ汽車旅行	佐山菫子	７－１０
悲劇の三重奏	小川のり子	１１－１２
ヨーロッパに見る老いの百景	遠山伊津子	１３－１４
『英国春秋歌壇』　木もれ日	バロー典子	１５
『英国春秋俳壇』　瑠璃の宝石	エリオットつやこ	１６
領事の仕事と英国の懐	田辺邦彦	１７－１８
ドイツ東部と北ドイツ鉄道の旅	岡村光雄	１９－２１
「ジャパン４００」		
江戸時代初期へのタイムトリップ	加藤節雄	２２
選りごのみ	クーパー矩子	２３
ユーロはなぜ危機に陥ったか？	春井久志	２４－２５
５０歳からの習い事	ウインター千津子	２６－２７
あなたはナローボートの夜と朝を知っていますか	津久井安子	２８
英国春秋つれづれ		２９

九州一周の旅

田村　陽子

今年五月、娘と二人で九州一周の旅に出た。
イギリスの冬は余りに長くて、暗いので
太陽に会いたかった。
温泉につかりたかった。
五月のそよ風に吹かれたかった。

一度も行ったことのない南国、九州。
長崎では路面電車と斜行エレベーターに乗って高台にあるある、広大なグラバー園に行った。作り話のオペラ「マダム．バタフライ」の舞台にふさわしく青い海と白い船がまぶしく、つつじの花が見事だった。

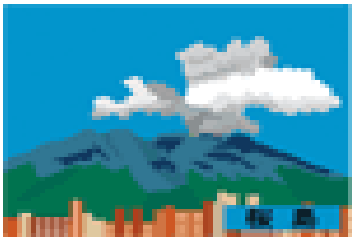
坂を下ると、大浦天主堂があった。１５９７年、秀吉の宣教師追放令により、長崎で処刑された２６人のカトリック信者にささげられ、建てられた。すぐ側に当時の神学校があって、踏み絵が展示してあった。私だったら踏むだろうか?・・・・冷や汗が出た。

次の日、原爆資料館を見学した。午前１１時２分で止まった柱時計が飾ってあった。当時の惨事を物語る色々な資料が展示してあった。

次の日特急かもめ１２号に乗って、JR 長崎を出た。新鳥栖で乗りかえて、新八千代に。そこからワンマンの一両編成の電車に乗った。何度もトンネルを通り、鉄橋を渡り、エメラルドグリーンをした大きな河沿いを走った。終点の人吉駅に着いた。そこで次の電車を待っている間、売店のお姉さんとおしゃべりをしていると、「五木の子守唄の里はそこからバスで３０分のところョ」と熊本弁で話してくれた。「お姉さんの顔は、お人形のようにきれいネ」とほめると、「ここは水がいいから、でも五木の水はもっときれいで、美人が多いョ」と話してくれた。

JR 人吉駅から乗った電車は、一両編成で、乗客はたったの８人。床は木タイル、中央両側に１メートルほどのテーブルとベンチがついていた。これは、日本３大車窓の１つ、霧島連峰のパノラマを見るためらしい。私はこれを見るために、何度も乗り変えをしてきたのだ。だが、良い天気にもかかわらず、私の期待したほどの眺めではなくがっかりした。期待が大きいといつもこういう事になるのだ。

JR 鹿児島駅に着いた頃は、夜の８時過ぎ、あたりは暗く、ネオンが輝いていた。ホテルまでタクシーで５，６分。６００円だった。部屋は６階にあり、温泉は１３階にあった。湯ぶねのまわりに風流な石が置かれ、もみじの木が置かれ、琴の音が静かに流れてきて、旅の疲れをいやしてくれた。
ぐっすり眠って、朝食の食堂へ。昨夜の疲れを更にとりもどすかのように、洋食、和食、鹿児島名産の…。ありとあらゆる種類がバイキングスタイルで並べられていた。トレイを持って待っていると後ろに並んでいたおじさんが「昼の分まで食べるんだョ」とニヤニヤしながら言った。みんな同じ思いなんだと思って、私もニヤッとした。



フロントに荷物を預けた。桜島を見たいと思った。煙をはいている桜島を、西郷隆盛がいつも見ていた桜島を。
ホテルを出ると、まもなく１つの像が建っていた。黒田清輝（１８６６～１９２４　鹿児島生まれの画家）とあった。“読書”を描いた印象派の人だ。もう少し歩くと、坂本竜馬とその妻の像があった。二人は西郷隆盛の仲人で結婚し、鹿児島へ新婚旅行に行ったのだ。港に着くと、「桜島はどこ?」と思う位に、あたりはか

すんで煙も何も見えなかった。火山灰が常時降ってくると思ったけどそんなけはいはなかった。マスクなどつけている人は一人も見かけなかった。桜島へ渡る大きな船が停泊しているだけだった。鹿児島中央駅で午後１４：１８分の特急霧島１２号に乗ると、まもなく右側の車窓から桜島がくっきりと見え、きのこ雲のような煙をもくもくはいているのを見た。すかさずシャッターを切った。やっと見れた!この車両は、イギリスのように、床にカーペットが敷いてあり、木のテーブルがついていた。デパートの地下で買った弁当には、たけのこ御飯、サバの塩焼き、えびフライ、さつま揚げ、漬物が入っておりこれがたったの４５０円!おいしかった！

森と林の中を通って JR 宮崎駅に夕方着いた。駅前にはカンナやソテツ等が植えられ、南国情緒たっぷりだった。ホテルに荷物をおいて、近くを散歩。大きな書店があって時間をすごした。欲しい本がたくさんあった。あちこちにソファーやいすが置いてあって、イギリスの Waterstone のようだった。県庁前まで歩くと、つつじが咲き、池にはコイ、ソテツの木が繁っていた。もう少し歩くと、ヤシの木が道路の両側に何十本とそびえたって、見ごとだった。

いよいよ九州の旅最後の地、別府に向かう。特急にちりん１０号１：３１分に乗った。別府に午後２：００頃着いた。

駅前に出ると、空を飛んでいるような格好をした、妙な像が建っていた。「油屋熊八、１８６３年生まれ、アメリカに渡り、クリスチャンになり、別府に来て、温泉の宣伝に貢献した」とある。

ホテルに着くと、食堂に今見たばかりの熊八の写真が沢山飾ってあって、このホテルの創始者であることを知って驚いた。部屋は最上階の１７階にあり、別府湾が見わたせ眺めがよかった。温泉はプールのように広いので、人も多く、その殆どがカン国人で騒々しかった。次の朝、よりどりみどりの朝食をお腹いっぱい食べて、温泉地獄めぐりの観光バスに乗った。真っ赤な血の色をした「血の池地獄」、ミルク色した「白池地獄」、地中海ブルーの「海池地獄」どれも９０°C～１００°C で危険防止の柵がしてあった。最後に３０分おきに吹き出す間歇温泉を見た。自然の持つ力に感動した。午後、海へ散歩に行くと、大きな船が停泊していた。船の切符売り場でたずねると、夕方６：００出発で翌朝６時に大阪港に着き、費用は１万円とわかった。朝の出発ならば瀬戸内海を眺められるが、暗やみの中を走って何がおもしろいのだろうか。

色々な思い出のあった九州旅行も終わりに近づいた。
温泉のおかげで、肌も髪もつるつる。おいしい食事、輝く太陽、丁寧で礼儀正しい店員、親切なおまわりさん、ごみ一つない清潔な町。身も心も洗われるような良い旅だった。

ロンドンに戻って３ヶ月経った。
肌も髪もなめらかさを失い、
おいしいコンビニもない。
道路はあちこちゴミだらけ。

でも７月になって、イギリスも夏がやってきた。
ウインブルドンが始まり、プロムが始まった。
ランチタイム　コンサートは毎日のようにあちこちで
そして美しい花咲く公園があちこちに。

九州旅行は遠い昔のことのように思われる。
今ロンドンに居てホッとしている。住めば都。

今は亡き夫を忍んで

矢嶋蓉子

私の憧れの地英国に１９９３年娘の誘いもあり、当時３才の孫娘、６才の孫息子の学校送迎と６０年住みなれた日本を離れ来英致しました。当初９年間は娘一家と車で２，３分の距離にあるフラットに住み、その後同居致しました。町のアダルトスクールに通い勉強しました。10 年間毎日たのしい厳しい日々でした。その間主人は町の写真クラブへ、私はサットンホリディインのスイミングのメンバーになって通いたのしい日々でした。然し主人の糖尿病からの足首から赤紫色になり血流の手術をして頂いたりしました。段々と歩行困難になり自分の体にも自信がなくなったのでしょう、突然自動車の運転免許更新を取り止め放棄することにしました（76 才）。お天気の良い日はドライブをナショナルトラスト会員になっての行動でした。北はスコットランドから南端のコンオール、又ウエールズには B&B を利用しての日々でした。車の免許放棄後はロンドンの町をバスにての移動に変り、その後はサットンストリートへの散歩となりました。足腰の痛みも加わり部屋に閉じ篭るようになりました。

そんなある日突然の痛みに救急病院へ、種々の検査をして頂いては入退院を繰返しました。最後は２０１２年３月５日の入院、十二指腸潰瘍破裂の手術も後一週間で自宅療養でと色々配慮して頂いて、エアーベットも借入れ自宅配置をチェック準備を整えていました矢先、肺炎を併発してのあっけない死でした。夜中に病院からの呼出しを受け娘、婿、私の３人で駆けつけました。激痛の為モルヒネを投与して頂き落付きましたところで帰宅しました。１時間後２度目の電話で駆込みました時には早息が止っていました。最後何の言葉もなく悲しい事でしたが、２年位前から書き留めていた遺書がありました。そこには「蓉子５０年来をありがとう、蓉子は１００才まで生きてたのしかった事を聞かせてくれ、待っているから」とのことでした。１００才とは今は亡き友の言葉「私は１００才まで生きるから貴女は１２０才迄生きてね」と、この話題を主人とよく話していました関係上「蓉子は１００才まで生きて」と言う言葉を残したのだと思います。又遺灰はロンドン、ヘンドンにある日本人墓地に埋葬してくれとありました。私共も何回か掃除に参加しました。彼はここを望んだのでした。これも早速手配を致しました。丁度英国はイースターホリディでもあって葬儀手続も時間が掛りましたが、娘一家が一切の手続をしてくれました。英国式日本式とミックスしたものでした。友人の牧師様の弔辞と、婿、孫の弔辞、詩の朗読と進み参列者有志の方の祝賀会を自宅で行いました。友人をお招きする事の好きな人でしたからきっと満足してくれました事と思います。残された私も愛猫との静かな生活を１００才迄生きる心算です。それにしましても英国エヌ、エチ、エスには大変お世話になりました事は本当に幸せでした。ありがとうございました。

この文章は 2012 年 JSTV に投稿したものです。今夏、私の俳句とともに皆様の目に入れて頂けましたら幸せに存じます。

烏賊刺（いかさし）に　　舌鼓打ち　夏日叶

遺影には　日射も眩しい　手を合わせ

真夏日に　ギャグも飛び出す　遺影から

私の失敗談

ヴァンダースケイフ日出美

長い英国生活の中で今となっては苦笑する出来事が幾つかある。其の中の２つをここに記載したい。

その１。私がまだ現役で仕事をしていた９０年代の頃である。ある朝、髪型や化粧、通勤着に気を配る余り出勤に手間取った。始発駅の次の駅から乗車する私は毎朝座席の確保は保証されていた。その朝もゆったりと座って Northern Line に乗っていた。地下鉄が街中の Camden Town に差し掛かったとき、箱型席の外側に座っていた私の横に立つ女性が、申し訳なさそうに「Excuse me　・・・・」と私に声を掛けてきた。私はてっきり、「気分が悪いので席を譲って欲しい」と言われるのではないかと思った。が、其の女性は遠慮がちに「あのー、貴女の髪にカーラーが付いています」と教えてくれたのである。満員電車の中で今まで気が付かずに Camden Town まですまし顔をして座席に座って来た私は、その驚きと共に非常に恥ずかしくなり赤面していた記憶が強い。しかし一方では、突如開き直って「あっ、どうもありがとう」と言いながら髪の天辺に付いていたカーラーを何気なく取り外し、その時は涼しい顔をしていたようにも思われる。

本当は内心では顔から火がでて、穴があったら入りたい心境であった。その女性は Euston で下車していったが、その人の注意がなければ私はきっとそのまま会社に行っていたことであろう。知らない乗客の中で恥をかくよりも、知っている上司や同僚のいる会社内で恥をかくほうが何倍も恥ずかしい。なのであの時点で注意を受けたことは幸いであった。それからは、毎朝髪にカーラーが残っていないかどうかを鏡の前で徹底して調べることにしたので、これが最後の出来事である。

その２。仕事を辞めた後の２０００年代、西洋式の習字、カリグラフィーを習いに Hendon まで週１回車で通っていた時のことである。練習が終わり、同じ方面から通っていた友人を乗せての帰路、１台の小型バンが私の車の後をつけている気がした。信号待ちの時も、その車が故意に私の車に接近して止まる。無視して走り出したら、また後を追ってくる。きっと私のノロノロ運転に文句でも言いたいのであろうか。スピードを出して逃げようと思っても速度制限３０マイルの道であり車の数も多い。次の信号に止まったとき、その車がとうとう私の隣にピタリと止まった。私は無視していたが、風貌の良くない中年男が彼の車の窓を開けて腕を振り回し何かわめいて私の関心を引こうとしていた。仕方なく私も窓を開けて「何でしょうか？」と恐る恐る尋ねた。その男は「後部の右タイヤがパンクしてペシャンコになっているよ」と教えてくれたのである。

同乗の友人は「あの人、顔つきは怖いけど親切な人ね」と感激していた。まったく同感。

私はその人にお礼を言って感謝の気持ちを伝えた。彼は片手を上げ握りこぶしの親指を立てて笑顔で走り去っていった。思いがけない親切に感激し、早合点した自分が恥ずかしかった。それにしてもタイヤが１つパンクしていることには全然気が付かない私であった。

エーデルワイスとアルプスの国へ汽車旅行

佐山菫子

今夏はわたしにしては珍しく大規模の旅行を思い立った。”Great Continental Railway Journeys” というマイケル・ポーティロが旅する BBC の番組で、スイスが二回特集されたが、そのとき、荒々しくも美しいスイスの大自然の姿に、心の高まりがおさまらなかったからだ。そこで、昔スイス在住の際知り合ったチュリッヒの友人に、10 日間の汽車の旅をしないかと呼びかけた。スイスのチュリッヒはわたしがヨーロッパに住みつくようになった最初の街。30 年ほど前、ユング心理学の分析家になるための訓練を始めた街である。当時は観光はほとんどしなかったし、出かけるとしても、みな車であった。だから、進行方向ばかり見ていて、山々を見上げ、見晴るかすという経験はあまり覚えていない。それに勉強がおもしろく、忙しく、現地に適応するのにもてんてこ舞いで、汽車旅行など思っても見なかった。

まずは到着したチュリッヒの空港でスイス・パスという簡便にして経済的な万能パスを買い、晴れてスイス中どこでも旅できる身分となった。おまけに博物館にも無料で入れるというのであるから、水戸の黄門さまの印籠さながらのパスである。車掌が来たときに「この印籠が目に入らぬか」と差し出せば、それで OK。博物館の入り口でもこれを提示するだけで入館できた。すべては寸前に購入した “Switzerland Without a Car” という旅行のガイドブックに詳しく書かれていた。

まずはお目あてのベルニナ・エクスプレス、それから日をあらためて、ユング・フラウ・ヨッホとグリンデルワルドその他周辺をまわった。この 2 点をまわるときは宿をとったが、あと、バーゼル、サン・ガレン、ベルンなどの著名な都市へはチュリッヒから日帰りにした。スイスはなんでも高価だし、小さい国なので、ほとんど日帰りができるからと、頻繁な宿泊と食事の世話を申し出てくれた友人の好意だった。

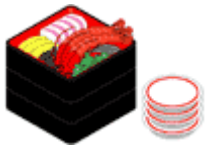
ベルニナ・エクスプレスは「スイス東南部のアルプスを南北に縦断する感動の絶景ルート」と日本語の案内にある。チュリッヒからまず、クールまで南東へ向かい（その間もすばらしい眺め）クールからがスタート。国境を南に越えたイタリアのティラーノまで汽車。 そこから西に向かい、同じエキスプレスのバスでルガノまで行き、全行程が終わる。パノラマ車であるから、横の窓から目を上にあげても、重なる山々の全貌が見える。緑の山々の連なりに見とれていると、次にはごつい岩山が後ろから重なる。さらにそのうしろから今度は氷河を抱く岩山が現れる。わたしの旺盛な想像力は岩山をまたいで闊歩する巨人たちの姿を見ないわけにはいかなかった。こんな大自然に住んでいたから人間は巨人などという存在を考えついたのだとひとり、合点した。眼下には氷河から流出したミルク色の川、湖。無数にある。途中には氷が解けて、滝となって、まっすぐな岩肌を奔流する何本もの白い糸。汽車そのものは、アルプスの峠を越えてイタリアのブドウ畑が広がる谷間まで高低差が約 1800m という起伏のあるルートをわずか 2 時間でかけぬける。高い橋を越えたと思うと、今度は 360 度のループ橋の上をゆるゆると

回転する。乗っているわたしたちにはそのすべては見えなかったが、あとで絵葉書でそのループのすごさを確認した。終点のイタリアのティラーノで宿泊。いままで通じていた友人の独語が急に通じなくなり、英語とイタリア語だけというのもおもしろかった。いよいよ、わたしの出番だった。

翌日ルガノまでのエキスプレスバスが出るまで、午前中いっぱい時間があったので、観光とウィンドウ・ショッピングを企てた。いろいろ閉館のところもあって、結局、旧市街にあるパラッツオ･サリスとよばれるサリスという貴族の何代も続いた古い館にフレスコ画を見に出かけた。ギリシャ神話、ローマ神話の主人公たちが壁や天井にひしめき、太古の物語をいぶし銀のように今に伝えていた。イタリアンガーデンもあって、中を堪能して出てくると、受付の人がひきとめておいてくれた日本人の若いガイドが待っていた。彼女の自宅は旧市街にあって、中がいろいろおもしろいので見ていかないかとの誘いを受けて、さっそく、お邪魔した。旧市街の住宅だけあって、地下の、冷蔵庫がわりになるという砂利床の冷たいセラーからもう一階上の地下の作業室をぬけると正式の玄関に出る。そこからは超モダーンに変身した居心地のよい居室やキッチンが続く。窓のすぐ下には川が波打って流れていた。地下の作業室にはたまたま生まれてまもない仔犬が６匹、大型犬ロットワイラーの母親の胸にしゃぶりついては互いにころころと遊んでいた。心和むひとときで、異国に定着して生活に励む日本女性の姿が印象的であったと同時に、旅先で出会う故国の人の親切が身に浸みた。

ルガノ行きのバスは時間通り出発。また、美しい景色を眺めながら３時間ほどして、ルガノに到着。ベルニナ・エクスプレスの旅はめでたく終了したのだが、さて、ルガノの街は大きすぎて、あまりに騒がしく、宿泊する気になれなかった。そこからまたイタリアに国境を越え、コモで宿泊することにした。スイスのイタリアとの国境の町はキヤッソと呼ばれ、そこからわずか２スイスフランでコモまで足が伸ばせる。コモでは湖に面した岸辺からケーブルカーに長々と乗って山頂まで上り、ガラス張りのレストランで夕食。また、山々を見晴るかしながら、夕陽が沈むまで果てしない宇宙を眺めていた。下りのケーブルカーからはコモの街の灯が美しくまばたき、まるで、夜空を見上げているようだった。

翌日、帰宅の前に、ルガノは避けて、ルカルノという駅に出て、そこからバスでお目当てのアスコナに着いた。アスコナは汽車の駅のない街だが、それだけに静かで、国際会議などがよく開催される。裕福な人々が多く住んでいるとも言う。空腹を抱えた私たちは、まずは昼食をとることになったが、回転寿司のあるアジア系レストランが目に留まった。あまりに清潔そうで、すてきな構えなので、ふらふらとそこに入ってしまった。値段は目玉がとびでるほど高かったが、外国でこんなおいしい刺身や寿司を食べたことがない。日本人の若い寿司職人と話しながら、いろいろ注文して、豊かなひとときを過ごした。見事な刺身の大皿を芸術作品のように作っていたが、それは私たちのすぐそばに陣取っていた老齢金持ちグループの注文だということだった。ここにも日本人がこんなかたちで定着していた。



アスコナにも大きな湖がある。湖畔にすばらしいショッピング街と庶民のマーケットがあって、真夏の太陽を浴びながら、アイスクリームを食べながら、休暇の醍醐味を味わった。帰りはまた、ルカルノに出て、それからチュリッヒ行きの汽車をとらねばならなかったが、ルカルノまで今度は湖を船で渡ることにした。これもまた、なんとも気分のいい夢の旅だった。ルカルノで汽車の時間を気にしながら、サラダたっぷりの夕食。この街もまた、もう一度ゆっくり行ってみたい街である。

船旅といえば、チュリッヒ湖の上流にあたるオーバーゼーでも静かなすべるような船旅をした。小さな船で込み合ってもいなかったが、船が岸辺をちょうど離れたあたりで、ものすごい爆音が聞こえ、船旅の仲間は目を丸くして全員空を見上げた。明らかに空軍の編成飛行の訓練だった。なにか特別の行事でも控えているのだろうか。５機の飛行機が飛んできてひとつになったかと思うと、いろいろな編成を組んで飛行を続ける。あちらから２機、こちらから３機、また、２機とはなやかだ。みんな感動している。はじめは下から見て黒い飛行機に見えたのだが、やがて、赤い腹に白い十字のスイスの国旗がそめられているのが見えてきた。まるで深海から、上を泳ぐ魚の赤い腹を見たような思いだった。スイスの山々と湖と空軍というスイスの夢と現実を見た経験が妙にいつまでも心に残った。

ユングフラウヨッホへの旅はその麓町、インターラーケンに汽車で行くことから始まった。

ここから各種の登山鉄道がでている。ユングフラウヨッホの話はあまりにも知られているのでここでははしょって、そのとき立ち寄った滝の街、ラウターブルンネンの話をしよう。インターラーケンから登山列車を選ぶと、すぐ次ぎがラウターブルンネン。雨の日は陰鬱だということがよくわかる高い山々に囲まれた街。その高い山々から流れ落ちてくる何本もの白糸の滝を感嘆しながら、ゆるゆると歩き、お目あてのトリュンメルバッハ滝に楽にたどりつくつもりでいた。バスも走っているとかだったが、健脚のふたりのことだからすぐたどりつくとあなどっていた。ところが行けども、行けども目的地にたどり着かないのである。滝の銀座通りも過ぎ、あとはただ、山に囲まれた田舎の風景。この道でいいのかと心配になった頃、人々がむこうから帰ってくるのに出会い、確かにその方向に向かっていることだけは確認できた。受付所が閉まるという６時が迫ってきた。と言っても走る元気もない。現場にたどり着いたときにはゲートがほぼ閉まっていて、門番のおばさんがもうだめですという。だって、まだ、６時３分前じゃないの、お願いだからひと目だけでいいから見せてと食い下がって哀願。するとどこかに電話していたが急に態度が変わり、「入れてあげるわ。あそこのエレベーターで人が待っているから、急いでいきなさい」。喜び勇んで、岩壁に設置されたエレベーターに向かって走った。と、中には係りのお兄さんがいて、「最後だよ、わたしが案内するから、すぐ降りて来るんだよ」と応対も快い。もちろん、もちろんと首ふり人形のようにふたりで首を強くたてに振って、中に入る。かなり上昇。エレベーターの中のベンチで一服しながら、わが身の幸運がまだ信じられない。「さあ、ここだ」と下ろしてもらったところから、コンクリートでかためられた上り坂を滝をめざして駆け上がった。急に元気が出て、足ももつれずについてくる。狭い、暗い洞窟のようなところに岩の切れ目があって、そこから滝が流れ落ちているのが見えるが、あまりに規模が大きいのか、流れの一部が見えるだけ。上から下へ通して流れ落ちているはずの滝の全景は見えてこない。超特大の瀑布である。怒涛のように流れ落ちる水の勢いは目前で自然の牙をむきだしにし、わたしはまるで小学生にもどったように怖気づいた。もう、もどろうとしていると、さっきのお兄さんが来て、「もっと上だよ。僕がついて行くから上りなさい」と促す。次から次へと勢いに乗って上るといくつもいくつも岩の切れ目があって、そこから滝がのぞけるようになっている。そうして、とうとう、一番上まで上った。あんなに疲れていた足がどうして元気になったのかわからぬままに、上へ、上へと駆け上り、おかげで念願の滝を満喫

することが出来た。帰りはバス停にすでにバスが来ていて、乗客が乗り込んで大混雑だったが、これを逃がしては一大事と日本のラッシュアワー並みの突っ込みをかけてもぐり込み、無事、駅にたどり着いた。あとから案内書を読むと、並立して聳えるアイガー(3970m)、メンヒ（4099m）、ユングフラウ（4158m）の三大氷山からこの滝に水が一度に流れこんでいるのだという。これはとにかく、一見に値する一大自然現象のひとつである。

袖刷りあうも他生の縁というが、今度の旅でも本当に多くの人たちと袖をすりあわせた。いつもはあまり知らない人に声をかけないわたしも、旅となると必要もあっていろんな人に話しかける。そうして彼らからどれほど助けられ、教えられ、励まされたことだろう。同時に今回の旅では過去の偉人たちとの出会いも数々あった。なかでも首都ベルン（この街は中世を今に残す街並みのため、街全体がユネスコの世界遺産になっている）に立ち寄った際、ほとんどの博物館・美術館が月曜日のため閉館している中でアインシュタインが若い頃しばらく住んでいた旧市街の家を訪ねることができた。ここは 20 代の彼が結婚して住み、第１子を授かったところだが、同時に科学の世界を変えたといわれる相対性理論が根づいたところでもある。ベルン大学でも講義を一時担当していたという。ユダヤ人の息子としてドイツに生まれた彼が一時無国籍の時期を経て、スイスの国籍をとり、やがてアメリカの国籍もとってその地に定着するのだが、イスラエルとの関係も深く、戦争が始まってからは二度とドイツの土を踏まなかったという。原子爆弾の投下にも批判的で、日本に来たこともある。日本で出版された彼に関する本が一冊陳列されていた。平和主義者、哲学者とも言われる人間アインシュタインに出会ういい機会となった。

ベルンは三方が城壁で、最後の一方はくねくねと曲がって流れるアール川で守られている。この川に何本もの高い壮大な石橋がかけれていて川の両側の地域をつないでいる。その橋から橋の間に木々でかこまれた山中の散歩道が幾層にも続いて、炎天下でも歩くことができる。谷底を流れるアール川ではその早瀬をものともせず、むしろそれを利用して、河童の川流れを楽しんでいる人たちが大勢いた。ゆるゆると山を下ってわたしたちはベンチに休憩しながらこの光景を注意深く見守った。彼らは岸辺ですばやく裸になって水着に着替えるとそれをリュックのような水漏れのしない入れ物にいれて、それを浮き輪のようにして仰向けになったり、うつ伏せになったりして、一見、のどかに流れて行く。今は昔、弥次さん喜多さんが衣類を脱いでは頭にくくりつけて大井川を泳ぎ渡った光景が重なって見えてくる。ここには犬も沢山来ていて、岸辺からウロウロと人間さまを見物。ご主人が川を流れ、犬が岸辺でその後を追い、ところどころで出会っては相互の安全を確認している愛らしい風景もあった。犬が泳ぐには流れが速すぎるのだ。

旅行から緊張してチュリッヒに帰ってくるたびに、わたしを必ず迎えてくれるすばらしい笑顔の男性がいた。テニスのロジャー・フェデラである。ずっと前の若い頃の彼が、白いＹシャツに黒のチョッキという地味ないでたちで銀行のコマーシャルに出ているのだ。この特大の看板やポスターは駅の周辺の目立つところに２，３箇所あったから、ドイツ語のほかのポスターにはなにひとつ馴染みのないわたしの目に、必ず飛び込んで来た。彼の笑顔はさわやかで、ただ一人の『知り合い』としても力強かった。なんの縁かは知らないが、わたしたちは世界中でいくつもの糸に結ばれているのだとの感を強くした今夏の驚きのスイス旅行であった。

26・08・2013

英国春秋劇評

悲劇の三重奏、オセロー

小川のり子

オセローは部下の選択誤りが元で自滅の道をたどり、イアーゴーは自らの奸計で墓穴を掘り、デズデモーナは未熟な恋で命を落としてしまう、まさに悲劇のトリオである。

今シーズン、ナショナル劇場で「オセロー」上演中。オセローにエイドリアン・レスター、イアーゴーにローリ・キニアと絶妙なコンビで演じられると聞き早々と予約したが、当日レスターは病気で休演。キニアのイアーゴーが一段とさえた舞台になった。

以前から「オセローは上演時間が長く、アクションの少ない退屈なドラマ」との偏見を持っていたが、今回のニコラス・ハイトナーの演出では私に新しい視点を開かせ、“うつらうつら”する暇を与えてくれなかった。まず、第一幕のベニスを除き、あと終幕までキプロスのミリタリー・ベースを舞台として展開。ベニス公国に仕えるムーア人の将軍オセローであるからミリタリー・キャンプが出て来るのは当然。多くの俳優たちが、迷彩色の軍服姿できびきびと舞台を駆け回るのは、非常に現実味があり、イギリスのイラクやアフガン駐屯兵を思い起こされる。イアーゴーがアルコールに弱い副官のキャシオーに無理に酒を飲ませて、喧嘩をさせ、オセローの不興を買わせるのもキャンプ内。多くの兵士達が周りで、「飲め！　飲め！　飲め！」とはやし立てる中で始まり、まるでパブで酔っ払いたちが喧嘩をしているようでもあり、セリフは 16 世紀、場面はまさに 21 世紀で進行して行くが、違和感は全くなし。

まず、主要人物 3 人のキャラクター・アサッシンとなってみると、
オセローは戦争と武勇に生きてきた男であり、世事に疎く、女性に気を使うことなど考えもしない人間である。原作には、“ベニス公国に仕える高貴な家柄のムーア人”とあるが、生まれはモーリタニアで、傭兵として戦闘で数々の勝利をベニスにもたらせた。フローレンス出身で実戦の経験のない主計のキャシオーを自分の副官にし、数々の手柄を挙げたイアーゴーを旗手にしたのが、結局命取りとなってしまう。また簡単に騙され、冷静な判断も下されず、ハンカチ一枚の為、激情に駆られて自分の愛した妻まで殺してしまうのだから、“男性的魅力”に乏しい人物である。なぜデズデモーナが彼に恋をしたのか？　ハンサムであるとか、セックス・アッピールがあったとかは原作にはない。ずいぶん昔、映画でオリビエがオセローを演じたのを見たが、白人の演じる黒人役の大仰な手振り身振りには感嘆したが、男としての魅力にはもう一つであった。その後何人かのオセロー役、ホプキンズも含め出合ったが、全て白人が演じたムーア人であった。今回、お目当てのレスターは病気で休演してしまったが、彼なら、ハンサムでセックス・アッピールがあるので、“魅力的”と言う面では大いに納得さされたことであろう。ただし代役のオセロー役も中々の好演で、黒人が演じるムーア人が非常に“自然”に写ったのが、新発見でもあった。これは当然のことであるが。

イアーゴー役は主役より見せ場がある。俳優なら、オセローよりも演じてみたい役ではないだろうか。シェクスピアの作品の中ではハムレットと並び“もっとも知的な性格”としてしばしば対照されるそうである。「・・・ご主人様には忠勤ぶりをご覧に入れて、かげでこっそりうまい汁をすする、たっぷりすすって私腹を肥やし、あとはわが身が第一だ。こう言うやつには根性がある、かく言う俺もその一人さ・・・」（小田島訳）と第一幕からうそぶく。経験豊かな自分をさておき、副官の地位を勝ち取ったキャシオーを大いに憎

み、彼を陥れるため色々と奸計を策す。そして主人のオセローにも“デズデモーナとキャシオー”の仲を疑わせるような中傷を次々と吹き込んでゆく。巧妙なイアーゴーの手にかかると周りの人物は彼の“操り人形”のようなものである。自分の妻でデズデモーナの侍女でもあるエミリアを騙して、ハンカチを盗ませたり、ベニスの気のいい紳士から金を巻き上げたり、副官殺害に失敗すると、突如その救助者に変身とすべてが思い通りに進行。イアーゴー役を演じるキニアは前回ハムレット役で登場し、非常な好評を得て何処かの男優主演賞を獲得したと聞く。 嫌味のない悪役のイアーゴーを安心して見られる俳優であるとは、私の贔屓目かもしれない。ただ、最後はすべてが砂上の楼閣となり、自分の妻まで殺して逃げ延びようとするなど、悪役の本性が露呈し、全くさえないイアーゴーに変身してしまう。これは次々に書きまくった超多忙の作者の時間切れというところか。

デズデモーナはベニスの元老院議員の娘である。世間知らずの箱入り娘が、どうして人種の違うムーア人の軍人を愛するようになったのか・・・と興味深いところである。原作では数行しか説明がない。「・・・私がオセローを愛し、ともに暮らしたいと望むことは、このたびの向う見ずな運を天にまかせた行動から、世間に知れ渡ったことでしょう。私の胸は夫の軍人としての人柄に惹かれたのです。その心にオセローの真の姿を見たからこそ、この人の名誉と雄々しい武勲の数々に、私の魂と運命を捧げ、妻となったのです。・・・」（小田島訳） しかし、彼女はオセローの数々の武勲に隠された真の姿を見逃してしまった。ヒーローの冒険話に魅せられて、その英雄に恋をした世間知らずの娘である。
このドラマではちっぽけな“ハンカチ”が大きな決め手となっている。オセローがデズデモーナに初めて送ったハンカチであるが、その由来がこれまた仰々しい。「・・・あのハンカチはな、あるジプシー女がおれの母にくれたものだ。・・・このハンカチをしっかり身に着けていれば、夫にかわいがられ、その愛を独り占めにできるだろう、が、もしなくしたり、人にやったりしたら、たちまち夫の目には嫌悪の色が浮かび、その心は浮気を求めて離れていくだろう・・・」（小田島訳）とある。その大切なハンカチを失ってしまい、そのため疑われて殺されてしまう。もう昔の話になるが、塩野七生の随筆で興味のある記述に出くわした。“或る時代のベニスではハンカチは女性の下着と同等に扱われ、それをみだりに落としたり、人にやったりしてはいけない…云々”である。正確に覚えていないので、言い切る自信はないが、もしそうならば、ジプシー女は別にしても、贈られたハンカチを無くすことは、より深刻事なのであろうが、殺される理由にはならない。従来、優雅で受身的なデズデモーナ役が多かったが、オリビア・ビナールは、敏捷な動きと歯切れの良いセリフで溌剌としたヒロインを好演。

最初にも書いたが、今回の「オセロー」は今迄で一番説得力のある舞台設定であり、出演者達も粒ぞろいであった。クライマックスのベッドで殺される場面は、役者にとって非常に演技がしにくいシーンと思われるが、それも何となくスムーズに見られたのは、一つはその舞台装置である。駐屯中の兵士の簡易住宅の一室。何の飾りもない部屋にベッドが置かれ、片隅に無粋な洋服ダンス、そしてその上に旅の途中を表すスーツ・ケースが２個乗っている。まるで身の潔白を明かすかのように純白のシーツにくるまって眠るデズデモーナをオセローは責める。「・・・雪よりも白く、アラバスター―よりもなめらかなあの肌に・・・だが生かしてはおけぬ、でないとまた男をだます。この火を消し、それから命の火を消そう。・・・もう一度、最後のキスを。こんなに美しく、こんなに罪深い女はいない。涙が出る、・・・愛すればこそ罰を加える神の鞭だ。」（小田島訳）と何とも勝手な言葉を吐きながら、「殺さないで！」と哀願するデズデモーナの首をしめてしまう。まるで家庭内暴力、嫉妬に狂った男の一瞬の電流のサージでもあった。理性に戻った時は後の祭り。狂気の後に襲う悔恨の情は苦いもの。デズデモーナの侍女エミリアの告白で、イアーゴーの奸計がすべてばれてしまう。いまさら悔やんでも最愛の人は戻ってこない。オセローに残された道はただ一つ、それは自ら命を絶つことであった。

ヨーロッパにみる老いの百景

遠山（金本）伊津子

海外で老いを迎える日本人の間で、まことしやかに語られている老いに関する逸話がいくつかある。2012 年 9 月より、1 年間にわたって、ロンドン、ハンブルク、デュッセルドルフ、ベルリン、シュツットガルト、ミュンヘン、ハイデルベルク、フランクフルト、ストックホルム、アムステルダム、ライデンなどの日本人コミュニティでフィールドワークをして収集した話の一つである。

> ……一人暮らしで高齢の日本人男性が、自分で身の回りの世話ができなくなって、病院に入ったのはいいのだけれど、そのうち、ドイツ語が話せなくなってきて……。医師や看護師がコミュニケーションをとろうとしても、患者の話すことがわからない。そうこうしているうちに、言動が荒くなってきたらしいですよ。ストレスでしょうね。病院は、相談するにも家族もいないし、どうにもこうにもならなくなった。それで、いろいろ本人の所持品を調べると日本のパスポートが出てきた。それで、ドイツの病院から（日本）領事館に電話連絡が入った。「なんとかしてくれ」ってことでしょうね。……

これはドイツ版であるが、もちろん、イギリス版やスウェーデン版など各国・各コミュニティ版がある。苦労して学習した外国語が話せなくなるなんて、何とも恐ろしい話であるが、もっと悲しい孤独死の逸話もある。日本からとんぼ返りで遺産を取りに来る家族・親戚がいた、などという話も珍しくない。いずれも、家族、結婚、仕事、お金、家などなど、人生が集約された老いの風景のひとつである。

近年における高齢化の問題は、イギリス、ドイツ、日本のような高齢化の先進諸国のみならず、急激なスピードで高齢化が進んでいる新興国においても、きわめて深刻な様相を呈している。日本のグローバリゼーションに伴って、日本人の国際移動（マイグレーション）が促進された結果、海外における日本人コミュニティの高齢化の問題も、この十数年で顕著となってきた。1970 年代から少しずつではあるが増加してきた国際結婚により長期にわたって外国に居住する日本人が老齢期を迎える世代に達し、老後をどのように過ごすかという問いかけが、ヨーロッパ各地の日本人コミュニティが互いに共鳴するように、ほぼ同時期に起こった。

国際結婚のパターンとしては、日本人女性とヨーロッパの男性の組み合わせが多く、世界 1 位に返り咲いた日本人女性の長寿（86.41 歳、2012 年）からみても、ヨーロッパにおける日本人の老いの問題は、女性の問題という特色を帯びていることは言うまでもない。1998 年に「楽しい老後」を目的に発足した英国日本人会・紅葉会と同様、ドイツ、オランダ、スイス、スウェーデンなどにおいても「老後を考える会」が発足し、様々な活動が展開されてきたが、いずれの会員も女性がその大半を占める。関係性を作るのが得意であることと、ケアの社会的役割がもともと女性に割り当てられていたところからも、世代を問わず、これらの活動に貢献している。興味深いことに、先の逸話に登場したような一人暮らしの男性の高齢者は、このような会の活動に興味がないのか、自分の老後には心配がないのか、なかなかネットワークに現れない「インビジブル」な存在である。

それぞれの地域・社会における福祉のシステムを理解して将来への備えを強固にするだけでなく、アクティブ・エイジング（WHO提唱）の考えに則って、高齢者のウェルビーイングを念頭にした活動が展開されている。海外で暮らす日本人の高齢化に関する問題は、

自分の文化（日本語・日本食・日本的ケアなどのプレファレンス）とどのように折り合いをつけるかという点ではどこも似ているので、それぞれの会の活動もよく似てくる。日本語によるセミナーや講演会、日本食の昼食会、茶話会、話し相手のボランティア、病人の送迎、病人食（日本食）の配達、散歩会、カラオケなどなどである。どこも派手さはないが、堅実な活動を展開している。中でも、日本食を持ち寄ったり、作ったりする会合は、参加者が多いと聞く。

それぞれ運営の仕方が違うので、お勉強が好きな会もあれば、カラオケが好きな会もある。議論ばかりに時間を費やす会もあれば、遊びに時間を費やす会もある。日本語で愚痴を言い合ってストレスを発散する会もあれば、笑い合ってストレスを発散する会もある。いずれも、行政の福祉サービスでは提供できないところを埋める活動を提供しているといえる。スウェーデンでは、フィンランド系高齢者の活動を参考にして行政からの援助を確保し、決して広くはないが、高齢者が食べて、話せて、歌うことのできる憩いの場所を確保している。

「日本人のための施設に入りたい。」日本食を食べることができて、日本語が話せる施設を求める声もないわけではないが、実現可能なブループリントができているコミュニティはまだない。よく話題にでてくるアメリカ・ロサンゼルスにある日本人向けのカルチュラル・センシティブ・ケアを提供する施設は、実は、ブラジルのユダヤ人高齢者施設をモデルにして設立されたもので、高齢者である一世ではなく、その子供の世代である二世が、もともとユダヤ人の高齢者施設であったところを、日系コミュニティの寄付と日本からの寄付をもとに買い取って設立したものなのである。子ども世代の現地化が進んでいるヨーロッパの日本人コミュニティは、そのような力は備わっていないと言わざるをえない。オランダでは、オーストラリアに移住したオランダ人で英語を忘れてしまった高齢者のケアのために、オランダ語を話す若い研修生をオーストラリアに派遣する話になってきているし、ドイツでは、韓国系看護師の受け入れの成功例やトルコ系の在宅ビジネスモデルにならって、日本からの介護士を確保したいという議論に転換しつつある。さて、ロンドンは、どのような動きになるのであろうか。

シュツットガルトで講演をさせていただいたとき、「老いはその人の人生そのものだから、最後は自分で考えるしかない」と締めくくったら、会場から拍手が起こった。日本にいてもなかなか明確な答えがでない難解な問いに対して、異文化にいながら答えを出すのは、さらに難しい。老いは、「正解のない問いの連続」である。だからこそ、一層、興味深い。

最後になるが、この一年、英国日本人会、竹の会、DEJAK の会、ハンブルク連絡会、まほろばの会、ミュンヘン友の会、ライン - マインの会、ライン - ネッカーの会、シルバー会、日蘭シルバーネットをはじめ、ヨーロッパの日本人コミュニティの皆様にはたいへんお世話になった。この場を借りて、お礼を申し上げたい。また、2013 年秋より、JAPAN　FOUNDATION（国際交流基金）の援助を得て、英国日本人会・福祉部とのコラボレーション・リサーチとセミナーの準備を始めるが、引き続きご協力をお願い申し上げる次第である。

英国春秋歌壇

木　も　れ　日

バロー典子

しののめの　暗きうちより　ほのぼのと
　天地分るる　時の好のまし

白藤の　小さきつぼみ　ふくらませ
　まだ来ぬ春を　待ちて垂れおり

雪のせて　地に伏す竹の　折もせず
　雪振りて立つ　時の清しき

懐かしき　ものに触らるる　思いして
　桜散る道　通り帰りき

ふるさとの　古き学びや　訪ぬれば
　子らの声なく　桜咲きおり

青芝に　白き花弁の　撒き散りて
　桜は緑の　一樹となりぬ

帰省子の　息子が植えし　紫陽花の
　年ごと育ち　花の咲く見ゆ

夕ざれば　オレンジ色に　灯を点もす
　海辺の町は　世界同じに

スカイプで　一千マイルを　乗り越えて
　外国勤務の　息子と話す

来し方の　すべてはゆかし　木もれ日の
　光となりて　今はきらめく

英国春秋俳壇

瑠璃の宝石

エリオット　つやこ

つや姫という名の新米届いたよ

かささぎのひな鳥は２羽低く飛び

もてあます思いほぐさん芥子の花

こでまりに降る雨こぼれ落ちにけり

眠る子をいだくぬくみや豆の花

つゆ草に瑠璃の宝石朝の露

子の声でめざめる朝や夏の客

冷麦茶こくんとのどを通りけり

真夏日の木蔭歩いてシャンゼリゼ

留守番の猫思われてパリ酷暑

領事の仕事と英国の懐

田辺邦彦

領事の仕事というのは、国家公務員、中央官庁の仕事としては、極めて特異な仕事ではないかと感じています。

政府の役割は、国民の安全を守り、国民の幸福を実現するために様々な施策を策定し実施していくことです。中央官庁はそのために農業政策、産業政策、労働政策、金融政策、環境保護、教育制度、医療制度、保険制度、生活保護制度などを定めていきます。そこでは個人の利害を超えて、国全体の利益、場合によってはある個人の利益を失うかもしれないが、国民全体の利益のために施策が策定されます。

しかしながら、そういった施策を実施するのは、多くは市町村役場であったり、農業協同組合であったり、各企業であったり、病院や医者であったり、教育委員会や学校であったりします。つまり、政策を策定するのが中央官庁であり、実際の国民、市民と直接触れるのは中央官庁以外の組織であることが多いのです。

外務省の役割も国益を守ること、すなわち、日本及び日本国民の安全と繁栄を確保することにあります。大使館など在外公館の役割は、国家を代表して外国に駐在し、駐在国政府と交渉し、日本国全体の利益を守ることが仕事です。

10年有効一般旅券　5年有効一般旅券

ところが、領事の仕事はどうでしょうか。我々の仕事は、皆さんが外国に行くためのパスポートを発行したり（日本では都道府県のパスポートセンター）、出生や婚姻に係る届け出を受理したり（日本では市区町村役場）、様々な証明書を発行したり（日本では市区町村役場あるいは公証人役場）、選挙の投票を実施したり（日本では選挙管理委員会）、教科書を配布したり（日本では小中学校）、事件・事故に遭遇した人々を支援したり（日本では市町村役場、警察、病院など）、家庭内暴力の相談を受けたり（日本では婦人相談所、児童相談所）など様々な分野にわたっていますが、これらを見てもわかるとおり国民個人の利益を守ることを主たる任務にしているのです。そして、毎日、国民の皆さんと直接触れ合って仕事をしているのです。これは、中央官庁では極めて珍しいのではないかと思います。

私は、この仕事が結構好きです。婚姻届を提出に来た新婚さんの目の輝き、出生届を提出するお父さん、お母さんの喜びの表情などを見ることができますし、事件・事故に遭って思わぬ立場に置かれた人々が悲嘆にくれているとき、寄り添って、何かしらの力になれてお礼の言葉をもらったときは、とてもうれしくなります。私自身は、最近は窓際に追いやられて、窓口に出ることがめっきり少なくなってしまいましたが・・・。

そんな仕事の中で、１０年以上前の前回のロンドン勤務の時、英国社会の懐の深さを感じた出来事がいくつもありました。そのうちなんとか覚えているものを二つ紹介したいと思います。

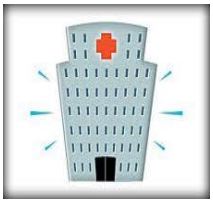
あるとき、在ロンドン総領事館（現在は閉館され、在英国大使館と統合されました）に相談の電話が入りました。どういうことかというと、夫がガンで余命幾ばくもない状態であり、しかしながら、死期を迎え、外国人との結婚を反対したため、何十年も前に家を捨てるように英国に渡った娘のことがどうしても忘れられない、夫も今は、あんなに反対したことを後悔している、なんとか娘を捜し出し、夫の思いを伝えたい、帰ってきて夫と会ってもらいたい、というものでした。在外公館では人捜しはしません。外務本省を通じて所在調査という行政サービスを行っていますが、在留届など在外公館の手持ちの情報の範囲内での調査です。この相談は、直感的には無理だなと思いました。しかしながら、どんな事情があるにせよ、自分の娘とけんかしてずっと会わない、あるいは会えないという状況は、年頃の娘を持つ私には考えられません。しかも死期が近いという。会いたいと思う父親、会わせたいと思う母親の心を慮ると、なんとか捜してあげたいと思いました。所在

調査の申し込み方法を案内し、外務本省からの所在調査依頼に基づき調査しましたが、在留届、電話帳にはありませんでした。パスポートを更新していれば在留届を出してもらっているので、ないということは、英国籍をとったのだろうか？　そうすると打つ手がないなとも思ったかもしれません。確か、英国日本人会の女性の幹事の方にも調査のお手伝いをしてもらいました。ロンドン以外の地方の日本人会など、調べられるところはすべて調べたのですが、なんの手掛かりもありません。通常の所在調査ではここまでで終了です。しかし、私は、この被調査人に到達しました。

そうです。ナショナル・インシュランス・ナンバーです。英国は個人情報保護に非常に厳しい運用をしている国です。列車事故が発生し、負傷者が収容された病院に電話しても名前はおろか日本人がいるかどうかすら教えてもらえないこともよくあります。当時もダメもとで、ナショナル・インシュランス・ナンバーを扱う役所に電話をしてみました。最初の対応は当然個人情報だからダメでしたが、ここからが英国の懐が深いところ。いろいろ事情を説明して、慈悲を求めます。すると、向こうも軟化してきました。日本ではそうはいきません。個人情報なのでダメなものはダメですと突っぱねられます。「それはお気の毒ね。わかったわ。では、１回だけ総領事館から当事者に宛てた手紙を転送してあげます。手紙を封書に入れてこちらに送って下さい。でも、一回だけです。相手から返事がなければ、それでおしまいです。かつ、今後の人捜しにこのことを前例としません。」

数日後、被調査人から総領事館に電話がありました。私は、手紙を送った次第を説明しました。いろいろな事情もあったのでしょうが、最終的に被調査人は帰国して父と対面し、さらに父の最期を看取ることができたそうです。そしてお礼の手紙をもらった我々は、手紙を転送してくれた英国人にお礼を伝えたのでした。

この方は運がよかった。それは、英国側の担当が、今回だけとして通常ではやらない対応をしてくれたこと。特に、行政機関が保有している情報を業務以外の目的で使用することは日本では法律で禁止されており、英国側の担当がとってくれた行動は日本の行政官であれば多分誰もやらないでしょう。そういう対応をしてくれる担当に当たったことは幸運でした。



もう一つ思い出深い話があります。ある日、総領事館に病院から電話がありました。聞けば、日本人の女性が急病で入院した、命に別状ないが重篤であり、約１ヶ月の入院が必要、だが、この女性はロンドン在住ではなく旅行者である模様で、かつ、女児を連れている（年齢は忘れてしまいましたが、１２－３歳であったと思います）、総領事館の協力が必要だ、ということでした。入院先に急行し、いろいろ聴取すると、母子家庭であり、子供を迎えに来る家族はいないとのことでした。さて困りました。これは、総領事館員交代で女児を面倒みるしかないな、どうしようもないな、でも、他の領事、副領事は単身、独身、子持ちだな、ずっとうちで面倒みるしかないか、カミさんにどう言おうか、四六時中一緒にいないといけないのか、うちには漫画はないぞ、風呂上がりにタオル腰に巻いて冷蔵庫にビール取りに行っちゃいけないのか、どっちにしろ、しょうがないな、など、訳のわからない考えが頭をグルグル回っていました。

すると、この難題を解決してくれる救世主が現れました。そうです。ソーシャルワーカーです。彼女らは、女児のホームスティ先を捜すと言ってくれました。おまけに、１ヶ月という長期間なので、女児は学校に通わせる、学校もこちらで手配する、日本人児童がいる学校に通えるよう努力する、とのこと。えっ、そうなの？　病気になったのは外国人旅行者なのに、そこまで世話してくれるの？　このときは本当に英国の人々のすばらしさに感動しました。さすが大人の国。その後、母親は回復し、二人は元気に日本に帰国しました。

我々の仕事は、このようにして、いろいろな方の助けを得てやっと解決できるものがとても多いです。常に、周りの方々の協力に感謝することを忘れてはいけないと肝に銘じています。そして、改めて、大人の社会、英国に感謝です。

（注：本稿は、筆者の個人的見解です。外務省や大使館の見解ではありません。）

ドイツ東部と北ドイツ鉄道の旅

岡村光雄

ドイツは、自由都市・小領邦国家の集まりであった中世の歴史が長く、その為各都市が独自の個性的な文化と歴史を持っています。そこで今回はドイツ鉄道 DB に乗り、ベルリンを起点に旧東ドイツ領であったヴィッテンベルク、デッサウ、ライプチヒ、ヴァイマールそして北ドイツのハノーファー、ハンブルグの各都市の歴史と文化を尋ねる 9 泊の旅です。ベルリン中央駅のチケットオフィスで購入した旅程は次の通りです。

旅程　5/20(月) ベルリン中央駅 ICE791(都市間超特急)→ヴィッテンベルク RB17870(普通列車)→デッサウ RB26117(普通列車)→ライプチヒ(泊)
5/22(水) ライプチヒ IC2250(都市間特急)→ヴァイマール RE3660(地域間快速)→ゲッティンゲン ICE536(都市間超特急)→ハノーファー(泊)
5/23(木) ハノーファーICE576(都市間超特急)→ハンブルグ(泊)

ドイツ鉄道は予想以上に快適で、ドイツ自慢の ICE 超特急ではユーロスター・TGV よりも車内が広く、高速でも揺れは少なく車内では静かで落ち着いた雰囲気。又普通列車 RB では、地元の人が頻繁に乗り降りする各駅での親族との別離、家族・友人との出会い等の心暖まる場面、満員の普通列車での中学生グループ男女の生徒が楽しそうにじゃれ合っている微笑ましい光景等を眺めて昔を懐かしむ事も出来ました。
又、駅周辺のホテルを取った事により時間間際にベルリン駅へ行き、行き先の違う列車に乗ってしまったミスを除けば乗り継ぎもスムース、全行程でトラブルは有りませんでした。

1. ベルリン
(ドイツ歴史博物館)
ウォーターリンデン沿いのドイツ歴史博物館は、旧東ドイツの歴史博物館を改装し 2006 年に再オープンした統合ドイツの歴史博物館です。その為新しい館内は重厚で整然として落ち着きがあります。8000 点と言われる実物とパネル等展示で上階にケルト・ローマ時代から第一次世界大戦迄の歴史、地階には第二次大戦の敗戦・ドイツの東西分裂・冷戦・ベルリンの壁の崩壊と 1990 年の再統一までが、国内の歴史学者と大学歴史学部門との意見を纏めた国際的な見地から解説されており、大変興味をそそられました。ドイツ史だけでなく、ヨーロッパ史の理解に役立つと思います。
(ベルリンフィル)
5/19 のベルリンフィルハーモニカは、ベルリンフィルハーモニーの演奏、クラウデォ・アバド指揮・ベルリオーズの幻想交響曲という超人気の演目の為、ロンドンでのネット・電話予約でも Sold out。そこで演奏当日、立聴き券でもと売り出し 40 分前にコンサートホール前に並びました。この立聴券も売り切れ寸前の時にオフィスのスタッフが声高にキャンセル券の販売を始めたので少し高価でしたが、直ぐに飛びつきようやくゲット出来ました。ベルリンフィルホールは、普段着姿の多いロンドンのフェステイバルホールと違い着飾った服装で入場する人が多く少し緊張しました。開演前の喫茶で言葉を交わしたトラベルでベルリンに来ている正装姿のオーストラリア人夫妻は本国のネットで購入したとの事。世界中で人気のチケットの入手の難しさを実感しました。

ベルリンフィルの熱演で観客も喝采。特に以前の正指揮者のアバドにはカーテンコールが鳴りやまず、何度も出てきて観客に答えていたのは印象的で私達も感激しました。

2. ヴィッテンベルグ　(ルターが宗教改革を始めた町)

ベルリンから南西約 100㎞のエルベ川沿いの静かな町ヴィッテンベルグは、修道士のマルティンルターが 1517 年 10 月、ヴィッテンベルグ城の付属教会の扉に張り付けた 95 カ条の意見書をめぐる論争により、カソリック教会からプロテスタントの教会が分離するという宗教改革の導火点となった場所です。
この教会は、町の中心のマルクト広場の近くにあります。しかし残念な事に現在教会は 2017 年の宗教改革 500 年記念行事に備え、改装工事を進めているとの事。内部にも入れませんでしたが、傍にルターの扉とラテン語で書かれた意見書の実物大の印刷が張り出されて居たのでそれを見て我慢しました。どの様な行事が行われるか期待する事にして、この町を離れました。

3. デッサウ　(バウハウス本校舎のある町)
美術と工芸を統合し合理的・機能的な建築デザインを目指すバウハウス総合芸術学校の活動は 1925 年デッサウで黄金期を迎え、此処で設計されたバウハウス本校舎はその代表作といわれ、ドイツ近代建築巡礼の聖地と言われています。
私たちはこの建物を見学するためデッサウ駅西口に出て、洒落た外装の住宅が点在している静かな駅前を通り大学敷地内に入りました。芸術家風の若者の姿もちらほら見られ私達もバウハウスの学生になった様な気分で更に進みますと本校舎が現れました。装飾を排し、直線重視、鉄枠と壁一面をガラスで覆うカーテンウオール工法の建物のシンプルな
美しさに暫くみとれました。この校舎の 2 階は 1922 年インドのカルカッタで開催された「カルカッタでのバウハウス」の展示会で、パウルクレー・カンデンスキー等バウハウスの教授陣とインドの画家達の 180 点もの絵画を見る事が出来ました。

4. ライプチヒ(音楽の町・東西の壁崩壊の端緒となった町)
ライプチヒはワーグナーが生まれ、メンデルスゾーン・シューマン等が活躍した町、又この町のトーマス教会にバッハが 1723 年 37 歳で音楽監督として招かれ、ここで宗教音楽の最高傑作と言われる「マタイ受難曲」を作曲・初演した音楽の町として知られています。

(トーマス教会)の館内はルター派のプロテスタントの教会らしく装飾はシンプルですが、豪華なパイプオルガン・クワイヤーの為の充分なオーケストラのスペース等音楽環境は充実しており、この教会の演奏家のメンバーにより現存する世界最古のゲバントハウス管弦楽団が生まれたという理由が良く分かりました。教会の主祭壇の下にはバッハのお墓があり、バッハのオルガン演奏・管弦楽団の指揮している姿が目に浮かぶ様でした。　向かい側にある 2010 年に改装されたバッハ博物館では、バッハの作品を試聴出来るコーナーもあり楽しめました。

(現代史博物館とニコライ教会)
この博物館の特徴は、敗戦後直ぐにロシア傀儡の東ドイツ支配に入った当時の市民の生活と、共産党の独裁に対する抵抗運動を当時のフィルムや写真・品々等で判り易く展示されている事です。この中で私は 1989 年 10 月 9 日、隣接するニコライ教会に於ける祈祷集会後の民主化デモの行進が、呼応したベルリン市民の壁の崩壊に繋がったテレビ画面を見て、ライプチヒ市民の強い自由への願望を感じました。

5. ヴァイマール　(ヴァイマール憲法・ヴァイマール共和国の町??)
私は「当時最も民主的と言われたヴァイマール共和国のヴァイマール憲法は、当然ヴァイマールの住民が中心となり作ったもの」と思っていましたが、正しくはヴァイマール共和国は通称名で正式名称は「共和制ドイツ」であり、首都のベルリンで憲法制定会議を行う予定であったが治安の問題から代わりにヴァイマールの地が選ばれ、この地の国民劇場で憲法が制定され事からヴァイマール憲法と言われているだけで、正式名は「ドイツ国憲法」である。

憲法制定議会が行われたと言われる国民劇場に行ってみても、公演プログラムのパンフレットが置いてあるだけ。又市庁舎にもこの事が取り上げられて居ないので不思議に思ていましたが疑問が解けると共にがっかりしました。人口 65,000 人の小さなヴァイマールにしては、バウハウス大学の男女学生、若い人たちの姿を多く見かけ、明るく華やいた雰囲気がこの町の良さと思いました。

6. ハノーファー　（英国の建国と王室の源流）

ニーダーザクセン州の州都であるハノーファーは、この地域に住むゲルマン系のザクセン人の一部がアングル人と共に 4 世紀後半ブリテン島に渡りアングロ・サクソン人となった事、又ハノーファー選帝侯国に君臨する選帝侯ギョルグ一世が、1714 年英国王ジョージ一世として（同君連合）即位し、ハノーファー朝を開き、この家系が現在のエリザベス女王迄続いている事等から英国とは深い関係にあります。

(歴史博物館)では、古地図によりザクセン地方の民族の動き、ハノーファー王家所有の、豪華な絵画・家具・馬車等の展示による王家の繁栄ぶり。繁栄の源泉は、銀・錫等の豊富な資源を有したハルツ高地の鉱山開発によるもの、等が良く分かります。

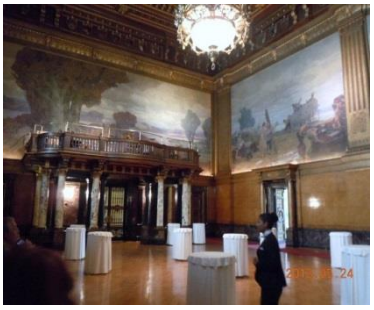
(新市庁舎)は 1913 年に建てられた宮殿の様な建物です。この一階の大ホールの中央には、この町の発展の歴史が 1689 年・1939 年の発展した状態、1945 年の 2 次大戦の爆撃による破壊された状態、そして現在の復興した様子が精巧な模型で対比されて展示されています。多くの学生のグループがこの展示を見に来ており、この町の市民の歴史への関心の深さが感じられました。この市庁舎の高さ 100m の展望台からはライネ川と直ぐ下のマツシユ湖と木々の緑に映える町の姿が眺められ、学生達も歓声をあげていました。

7. ハンブルク　（ハンザ同盟の中心都市として栄えた、誇り高い港湾自由都市）

ベルリンに次ぐドイツ第二の港湾都市ハンブルク市は中世より王侯貴族の支配を受けない自治権を持った自由都市として、又ハンザ同盟の中心都市として栄えてきましたが、現在のドイツ連邦に於いても、特別市としてハンブルク一都市だけでハンブルク州を構成しており、これが市民の自慢です。

(市庁舎)

高さ 112m の尖塔を持つ豪華な市庁舎の内部は、重厚な内装の州議会と州政府の会議室・事務所等部屋数は 647 部屋もあります。しかし王室・貴族の部屋の様に華美な肖像画、高価な宗教画、家具類等は少なく、この都市の発展に尽くした人達の人物像などの絵画が多いシンプルな作りとなっています。



約 40 分の館内ツアーのなかで、印象的だったのは、壁画と天井に描かれた絵画のガイドの説明でした。古代アテネ、中世ヴェネチィア、アムステルダム、そしてハンブルクの 4 都市の絵画。

「これらの 4 都市が古代から現在迄での自由都市国家の代表である」次の部屋では天井に描かれた、アジア風、アフリカ風、中東風などの絵画。

「これは、ハンブルグが世界に向けて交易の環を広げた事を意味する」そして大広間の、大木だけの無人の海岸の絵、市民が木造船を作っている絵、神聖ローマ皇帝が市民達に自由都市の認定書を渡している絵、港から沢山の木造船が出港している絵。様々な船が行き来し、大型クレーンが林立している現在の港の絵。「これは市民たちの力により、無の状態から此処まで発展を遂げた、歴史を描いた絵である」先人達が勝ちとった自由を誇りに思い、これを守ろうとするこの町の人達の意気込みが伝わってきて感動しました。

「ジャパン４００」
江戸時代初期へのタイムトリップ

加藤節雄

今年は日英交易開始 400 年の年に当たり、全国規模で「ジャパン 400」の催し物が展開されている。1613 年にキング・ジェームズ 1 世が日本の将軍へ特使を送った。東インド会社の特使船「クローブ号」は長崎の平戸に到着、船長のジョン・サリスを中心とした特使チームはすでに日本に住んでいた英国人ウイリアム・アダムズ（日本名三浦按針）の手助けで江戸へ登り、将軍（２代目徳川秀忠）に謁見、キング・ジェームズの親書とともに当時発明されたばかりの望遠鏡を献上した。喜んだ将軍はキャプテン・サリスにご朱印状を与え、その上、お返しにと鎧兜と屏風をキング・ジェームズに贈った。英国はこの年から長崎の平戸を中心に日本との貿易を始めることになる。

日英交易 400 年を祝う「ジャパン 400」は、学者、歴史家、政治家、経済人、外交官、ジャーナリスト等のイギリス人の日本専門家が中心となって結成された実行委員会のもと、今年 1 年間にわたり、日交流事業を展開するという大規模日英交流事業である。過去おける日英交流事業は大体が日本のイニシアテイブで始まり、イギリス人はそれに乗っかるという形だったが、今回は完全にイギリス人がイニシアテイブを取り、それに日本が乗っかるという今までとはちょっと違う形で始まった。私は何故か最初から実行委員会に組み込まれ、公式カメラマンと言う肩書まで頂戴して、ボランテイアとして主な行事の記録のために写真撮影をする羽目になってしまった。

400 年も前のことなので、歴史的記述は残っていても、現実には何も残っていないのではないかとタカをくくっていたが、これが大違いで大いに驚かされた。先ず 400 年前に日本へ船を送った東インド会社は最近復活し、当時のロゴマークやパッケージを使用、民間の会社としてコインを鋳造する権利もそのままで、今回は「ジャパン 400」記念の金貨、銀貨をそれぞれ 400 枚ずつ発行した。キャプテン・サリスの墓碑はロンドン・フラムのオール・セイント教会に残されており、ここでは 6 月に「ジャパン 400」を記念する大きな催し物が開催された。ケントのジリンガムにはウイリアム・アダムズが洗礼を受けたセント・メアリー・マグダレン教会が今でも教区教会として存続しており、9 月にはここで平戸大名松浦家の 41 代目の当主がアダムズへの献茶を行った。ジリンガムでは毎年三浦按針祭が開催されている。

クローブ号のスポンサーは当時勢力のあったシティー・ギルドのスキナーズ・カンパニーだった。2 月には当時そのままの姿を残すスキナーズ・ホールで「ジャパン 400」を記念して盛大なレセプションが開催された。また、当時のスキナーズの会長で「クローブ号」に資金提供をしたサー・トーマス・スミスの墓がケントのサトン・アット・ホーンの教会にあり、9 月には「ジャパン 400」実行委員会のメンバーが菊とバラで造られた日英の国旗の形をした花束の献花式を行った。

将軍に贈られた望遠鏡は残念ながら保存されていないが、将軍がキング・ジェームズに贈った鎧兜は現在でもロンドン塔に保存されている。今回、実行委員会では当時の文献をもとに望遠鏡のリプリカを製造、望遠鏡はロンドン塔に寄贈され、将軍の鎧兜とともに陳列されている。

今回の「ジャパン 400」を通して、改めてイギリス人の歴史感覚と保存･記録の素晴らしさに感銘を受けた。歴史的な記述だけでなく、教会やホールといった 400 年前の建物がそのまま残されており、墓石や墓標もそのまま残されている。イギリスの文献を通じて日本の江戸時代初期の様子が彷彿としてくるようだ。私にとっては正に 400 年前へのタイムトリップとなった。

選りごのみ

クーパー矩子

ひとに心魅かれる時何がその基準になるのだろうか。同性、異性を問わず自分に無いものを相手に見出す時？　その時点で自分の立場や気の持ちようも違っていようから好みも変っていくのだろうけれど…。
思い出してみると小学生の頃は優等生タイプの可愛子ちゃんを素敵だと思っていたようだ。中学生時代は勉強がよくできるというより機知に富んだ少し反逆的な人がよかった。

高校生の時には女嫌いだというスポーツマンの動作に心ひかれて三年間の片思い。会社員になるとちょうど年頃のせいもあってかデイトする相手がぼつぼつ出てきた。長いことあこがれていた年長のいとこに振られたせいか、彼のような明朗で男らしいポピュラーなタイプから離れた好みになっていった。群れを去った一匹狼タイプで少し蔭のあるやくざっぽい人が良くなった。「お金もうけのうまい人と縁が無いのね」と母に云われたのもこの頃だが、商社で見かける人達は仕事はできても調子よすぎてかかわりたくなかった。
画廊に勤めたらこれ迄と全く異なった芸術家タイプ達と個展を通して知り合うようになった。気さくで話題も豊富、私のこともすばやく理解してもらえたけど、すぐに誘いをかけてきて油断もすきもない感じだった。ふり返ってみると相手から心をうちあけられるよりも自分からその人に向っていく方が性に合っているのかも。

以前歌舞伎の公演で若手役者が娘役で出、その可憐さいじらしさ、その所作にぽうっと心をうばわれていた。又、昨年日本で宝塚の連続公演をテレビで見た折、一人の男役の人から目が離せなくなった。その踊りの動作、歌声、着こなしすべて他のメンバーなどかすんでしまうほどに魅了されてしまっていた。我に返った時、自分は男の演ずる女、女の演ずる男が良いというのは、これは無いものねだりではあるまいか！
そう考えていく内に人に惚れたり、かかわっていく虚しさを徐々に感じるようになってきたのである。そのかわり、動物植物自然界へと目が向きそれを傍らで愛でるようになったと気付いた。こうなるとこれは俳句の世界へゆくしかないのか。とはいいながら一抹の淋しさも覚えるこの頃である。

花八つ手

雨宿り　すれど濡れゆく　秋時雨

秋嵐　押されるまゝに　医者通い

敬老日　互いに譲れぬ　夫婦かな

ねぎらひの　思はぬ電話　秋気満つ

衿立てて　いつか足踏み　待ちぼうけ

無心なる　まゝ一人行く　落葉道

逆らわず　和して暮さむ　花八つ手

ユーロはなぜ危機に陥ったのか？

春井　久志

聖句：　『コリントの信徒への手紙（二)』　第 12 章 7－10 節

欧州連合（EU）が 2012 年のノーベル平和賞を受賞した。その受賞理由は、「過去 60 年の EU の歩みが欧州の平和と和解、民主主義と人権の促進に貢献した」ことであるとされている。「ユーロ危機」が世界経済に悪影響を与えているという欧州統合の負の側面ばかりがマスコミをにぎわしてきた最中に、EU の統合進展が再評価されたことの意味は大きい。「リーマン･ショック」、「ユーロ危機」に続いて［世界経済危機Ⅲ］に発展する危険性が高まっている現況下での、平和賞の受賞の意味を高く評価するべきであろう。

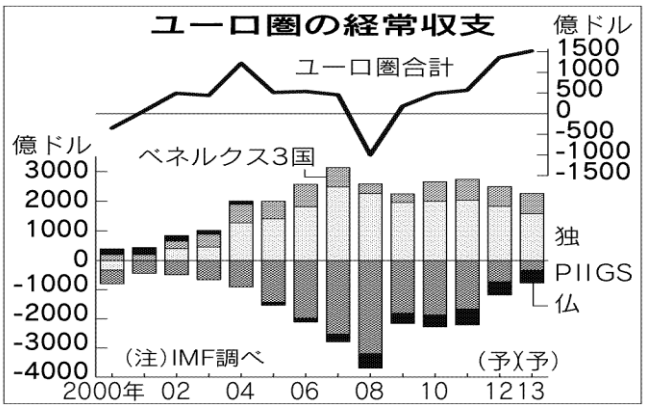
それでは、「ユーロ危機」はなぜ発生したのであろうか。EU のジャン・モネをはじめとする欧州の指導者たちが過去 60 年にわたって智恵をしぼり、統合へむけたたゆまない努力を払って来たことの結果である。欧州統合に対する彼らの信念と実行力に基づく、独仏の和解と資源の共同管理を目指した欧州石炭鉄共同体の創設は EU 設立の原点になった。その後の東西冷戦の終結を受けた共通通貨「ユーロ」の創設は、域内関税の撤廃や共同市場（common markets）の創設による「ヒト・モノ・カネ」の自由な移動を可能にした欧州市場のいっそうの進展と統合を目的としていた。しかしながら最初に着手されたのは 1988 年の欧州中央銀行の創立による金融政策の一元化にとどまった。通貨同盟（a monetary union）を先行させて段階的な統合を優先した結果、EU 加盟国のうち、イギリスなど一部の国はユーロを採用しないことになった。また、財政主権に基づく財政政策も銀行の認可や規制･監督などの銀行行政も預金保険制度も各加盟国に委ねる現状維持にとどまった。

単一通貨「ユーロ」は、多くの悲観的な評価にもかかわらず、極めて円滑に導入され各国に受入れられた。一方で、従来の為替レート変動の不利益や通貨交換の手数料などの解消によって、各国の金利水準やインフレ率の低下が実現し、域内の貿易取引や金融取引が急激に拡大し、経済成長に大いに貢献した。他方で、金利水準や物価水準、財政収支や政府債務残高、経常収支の不均衡（図参照）、経済成長率などの面では、加盟国間に格差が存在し、また格差の拡大が生じた。いわゆる「リージョナル・インバランス」（regional imbalance）の拡大である。このリージョナル・インバランスの拡大は、金融政策のみが共通化されたのに対して、それ以外の財政政策、銀行行政などは各国バラバラという制度的欠陥の必然的な帰結であった。

「リージョナル・インバランス」の拡大を解消して、欧州統合をさらに進展させるためには、どのような課題があるのか。今次のギリシャ危機に端を発する国家債務（ソブリン）危機を経験したユーロ圏各国は、現在、新たに 4 つのビルディング・ブロックの構築に歩み始めていると評価することができる。すなわち、①ユーロ圏の金融システムの安定化を図る銀行同盟（a banking union）、②欧州共同債券を発行して「財政移転」（所得移転）を可能にする財政同盟（a fiscal union）、③労働市場などの改革（汎欧州的な失業保険制度の創設など）と④競争力の向上を目指す経済同盟（an economic union）、および EU のあらゆる側面にこれまで以上の民主主義的な合法性を与えることができる政治同盟（a political union）である。特に、現時点で最重要視されるのは、上記５つのビルディング・ブロックを結合して EU 域内の財政移転を通したリージョナル・インバランスの縮小と

解消であろう。イソップ寓話を引用して「蟻」にたとえられるドイツなど北欧諸国の経常収支黒字国（ ＝債権国）から、「キリギリス」にたとえられるギリシャなど PIIGS 諸国（赤字国＝債務国）への財政移転による経済成長率格差や経常収支不均衡の縮小と解消を実現することであろう。そのためには黒字国のこれまで以上の高い経済成長とより高い物価水準の達成が不可欠である。

この目標の達成は決して生易しいものではなく、また十年単位の長い時間を要することは否定できない。しかしながら、EU 諸国は、今後とも紆余曲折を経つつも、新たな欧州統合への道をすでに歩み始めていると評価することができる。「遥蕩（たゆた）えども沈まず」が EU の強みであり、過去 60 年の実績である。まさに、ノーベル平和賞を受賞したゆえんであると言える。



出所：　『日本経済新聞』２０１２年１０月７日付

（本文は２０１３年春号締切後ご寄稿いただきましたので、筆者の了解を得て今回、秋号に掲載させていただきました。・・・編集部）

50 歳からの習い事

ウインター千津子

私の 30 代、40 代は主婦、母親、仕事で明け暮、自分の自由な時間は全くなかったといってよいでしょう。

幸か不幸か、私が 50 歳にさしかかった頃、当時長年勤務をしていた、邦銀の地銀が海外全支店撤回という表明をしました。当然のことながら、私は失業者。　娘も大学を卒業して、日本へ行ってしまい、ここで少し休憩、しばらく専業主婦をやろうと思いました。しかしやはり、長年仕事をしていたので、3 ヶ月も経つとそれにも飽きてき、地方紙の中で、経理や総務の仕事を探し始めることになります。

その広告の中に、現在、仕事をしていない人を対象にコンピューターコースを週に 3 日、6 ヶ月コースという記事が載っていて、場所を調べると、何と私の家の隣のカレッジ。　早速申し込みに。銀行時代、コンピューターはありましたが、皆、アシスタントがやってくれ、私は出来上がったものが正しいかをみて、サインをするか判を押せばよいだけだったので、実際には殆ど、コンピューターなど触ったこともありませんでした。
コースは、Microsoft Office のコースでエクセル、ワード、アクセス、パワーポイント等。　皆、中年以上の人ばかりでしたし、先生も中年以上、とてもリラックスしてコースに参加できました。その頃は、ダイレクションのファイルとフォールダーの違いが分からず、一体、先生は何を言いたいのか、全く分かりませんでした。それはそのまま、6 ヶ月コースの終了後、Guildhall の試験に受かったという証明書が家に届き、お免状が一つ増えたと喜んだものです。
運が良い事にその後、このコンピュータースキルを活用できる仕事が見つかり、ダイレクションの意味もわかって今日に至っています。今では、iPhone や、iPad を何とか活用できています。

そして、コンピューターコース終了の 1 年後、「コルドンブルーの青い空」という本を友人が貸してくれました。それを読んでいるうちに、元々、料理好きだった私は、このコルドンブルーとやらの料理学校に行きたくなったのです。ディプロマコースはとても無理でしたが、3－4 日コース、ワークショップなど、フランス料理の基本から、テクニックコース、お菓子、チョコレート、パン作りまで、10 程度のコースに参加しました。お蔭様で、レシピーを読めば、その意味がわかり、まず、その通りに出来るようにもなり、自己満足しています。勿論、出席証明をいただき、台所に飾ってあります。ある日、お菓子つくりのコースで、シュガーペストでバラの花を作ったことがありました。それが何ともきれいで可愛らしい。ふっと、シュガーアイシングのコースを地元のカレッジでやっていることを思い出しました。シュガーアイシングのケーキデコレーションをやれば、孫達にもお誕生日ケーキを作ってあげられるし（その頃は孫の影も形もありませんでしたが）皆を喜ばせることが出来ると思い、今度は、Hertford College（当時、私は Hertfordshire に住んでいた）にエンロール、これが６年続きました。ここで習ったことの最大の成果は娘のウェディングケーキを作れたことでした。4 ヶ月かかって作りあげ、それは誇りに思いましたが、それで、ケーキデコレーションに対する私の精力は使い果たされてしまったようです。そして次は・・・と思っている所、ひょんなことから、ロンドンに引越しをしてきました。ピアノ好きな友人が二人おり、その二人から、子供の頃、ピアノをやっていたのなら、また始めたらいいのにと、大いに励まされました。私もまた、ピアノを弾きたいと思っていた所だったので、早速ピアノを購入、一人でバイエルから始

め、1ヶ月でバイエル終了、さて、失ったピアノの感覚を呼び戻すため、先生につこうと思い、先生を探すことになります。やっと一人みつかり、よく教えていただきましたが、何となくしっくりいかない。それでまた、苦労をして一人見つけました。所がこの先生は私が弾くより自分で弾きたがったのです。当時のレッスン料は、1時間30ポンドでした。先生が弾くといっても、もう60歳を過ぎていた人だったので、あまり芳しくなく、いつも、今日も高いリサイタル料を払わせられたと思って帰ってきていました。しかし、その先生は、音楽理論のマスターで、私のピアノは聞いてくれませんでしたが、1回のレッスンの10分くらいは音楽理論を教えて下さいました。その先生のお蔭で、Music TheoryのGrade 5に合格することができました。その後、まるで、奇跡のように今のピアノの先生に出会い、既に5年も同じ先生の元で習っています。下手の横好きのままであまり進歩はありませんが、やはり、ピアノを弾くことが好きなせいか、これは今でも続けています。

最新の習い事は水泳。4ヶ月前に、現在、私が所属しているジムで、Free 10 minutes swimming introduction　という宣伝のちらしがプールの横に置いてあったのを見つけました。私は全く泳げないので、10分、しかもフリー、イヤだったら無理に水泳を習うことはないと思い、このフリーイントロダクションを予約しました。水泳のコーチが私に電話をくれた時、私は66歳、全く泳げませんと言ったら、先方は少し黙ってしまい、まぁ時間はかかるけれど、とシブシブでした。でもそのコーチに会い、まずは水の中を歩くことから。これは私はウオーターウオーキングを1年以上やっていたので、まずは合格、次に唇を水につける、鼻、耳と順番につけて、最後は顔、そしてそれでは今度は身体全部を水の中に漬けなさいと言われ、思い切ってやったらできてしまいました！そうしたら、今度は目をプールの中で開けろと言われ、開けたら、プールの中が見える！水の中に身体全体をつけることなどやったことがない私には感激の瞬間でした。
そして今は背泳ぎ、バックバタフライなどはコーチはもう何もいう事はないというまでにできるようになったのです。今の難関は、クロールの練習、これがなかなかできないでいます。

そういう訳で、今日も朝6時半にプールへ。ひたすら、息継ぎの練習、そして午後はピアノに向かってモーツアルトの「きらきら星」の練習。週末はお友達をお呼びしてディナー、お誕生日にはバースデーケーキ作りと、この15−6年、老域にさしかかってきてから習ったことは結構役に立っています。

一体どうして私は、このように習い事が好きなのかわかりませんが、全て（ピアノをのぞき）、50歳を過ぎてから習ったことばかり。そして、自分の力だけでは到底できないことを教えて下さる先生方に敬意。

あなたはナローボートの夜と朝を知っていますか

津久井安子

答えが　”Ｙｅｓ！”ならあなたは幸せな人です。若し
答えが　”Ｎｏ.”ならば、あなたには新しい幸せを
経験する資格が有ります。

誰かと、或いは家族ともっと心を寄り添わせたかったら、
ナローボートは絆を強め、より身近な関係を作ります。

ナローボートには、癒しの二大要素、水と緑がたっぷり
あります。　カリカリした神経をそーっと包んで、
ゆったりと運んでくれます。

あなたが今まで見たどんな広い空よりも、高い山の頂きに寝転んだ時よりも
ズーっと広い空を、アクアダクトの水路は見せてくれます。

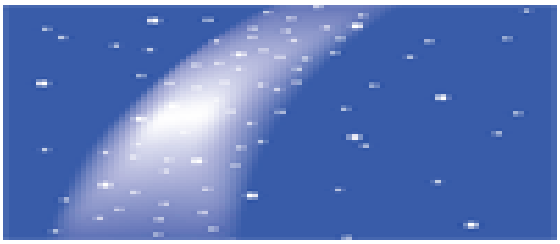
相手の警戒無しに、生き物達の息遣いを感じる近さで、ユックリと野鳥、子羊、
時には人間を見続ける事が出来ます。

両側に迫った大木達がすっぽりと運河を覆い、空が全く見えない処では
他所には無い”幽邃境”があなたを待っています。

木漏れ陽が水面の漣と戯れた後に、木の幹に映す模様を眺めていると
時の経つのを忘れます。

星の瞬き、霧の流れ、そして水のたゆたうかすかな音があなたを
自然の仲間に迎えるでしょう。

英国に有って日本に無いもの！　其の一つがナローボートです。



英国春秋つれづれ

「富士には月見草がよく似合う・・・」といったのは太宰治だったと思うが、わが家にその月見草が咲いた。もっとも早朝にひっそりと咲き、夕方にはしおれてしまうので、別名、“宵待草”とも呼ばれるのに、月を愛でることのできぬとは少々哀れでもある。この種子は遥かアメリカはユタ州から旅してきたので、その温度差に戸惑っているのかもしれない。そのそばに、これはヴァージニア州出身であるが、私が“シェナンドウのベル”と名付けた釣鐘草の一種が咲いている。ここ 10 年ほど毎年夏になると、ほんの少し緑がかった白色の小さい釣鐘をつける。
数年前までは、ハンブルグはアルスター湖畔に咲いていた鳳仙花に似た花があったが、あちこちに広がったのと、ボックス・ヒルのふもとで憎々しげに大繁殖していたのを見、我が庭からは退散していただいた。また、これはイギリス産だが、カンタベリー・ベル（風鈴草）の紫と白が群れ咲いている。今年初めて気付いたのだが、この花の白は二重の花びらをつけ、フリルのスカートをはいたようでなかなか可憐である。こうして我が庭の一角は、各地から持ち帰った種子で咲かせた“野の花”で埋まっている。

種子から育てたのは花だけではなく、木もある。竹は 60 年に一度花を咲かせ、あとは枯れてしまうと聞く。ある公園の枯れた竹の先からいただいてきた種子で育てたのは、いま有に 2 メートルを超え、さわさわと涼風を運んでくれる。ヘンドンの墓地清掃の際持ち帰った２～３センチのもみじの苗が、今 1 メートル以上に成長した。秋になると真っ赤に色付き、故郷の秋を思い出させてくれる。2～3 年前大嵐の後、近くの公園で柳の小枝が吹き飛ばされたのを、生け花の添えにと数本もち帰った。何度も使っているうちにそれから根が出て来たので庭に植えたが、水気が少ない場所だったので育ちが悪い。柳と言えば水ぎわと来るので、池か川でもあればよいのだが、我が家では椿のそばでいじけて育っている。

話は変わるが、いま日本では“シルバー川柳”が盛んと聞く。以前からある川柳に“シルバー”が加わると、人生に対する滑稽味・風刺・機知・警句などの要因にグーッと深みが加わり、思わず「そうだ、そうだ」と相槌をうってしまう。
俳句のように、季語・切れ字の制約がなく、口語で語られ、政治家や時の話題を揶揄し、人生のペーソスを笑い飛ばしてしまうところに妙味がある。ということで私も利害関係のない政治家を肴にしてみたが、“賞味期間切れ”のわさびというところ。

ユーキップ（UKIP）切符はあれど　汽車はなし　（United Kingdom Independent Party）

SNP　霞を喰らって　国始め？　（Scottish National Party）

公約と　良薬は甘いほど　効き目なし

ユローと　ユーレイの違いは　**おあし**とお足なし

長ろうべきか死すべきか　それが疑問だ　脱 EU

プーチンは　“不　沈”とおごる　裸の王

ＨＳ２　コストに速度が　追い越さる？　（High Speed 2 Railway）

『英国春秋』　2013 年　秋号　　（No.23）

編集人　　小川のり子
発行人　　佐野圭作
発行所　　英国日本人会
事務局　　c/o　JEIB
53 New Broad St., London EC2M 1JJ
原稿の送り先　　ogawa@japanassociation.org.uk または
Mrs. M. Hodgson,　492 Canterbury Way, Herts. SG1 4ED